



辺境の地の孤児院に
心優しい敬虔なシスターがいました。

身寄りのない子供たちの世話をして、
神へ祈りを捧げるいつもと変わらない日々。

そんなある日、
見慣れないフードを被った
怪しい男が近づいてきました。

「あの……うちの孤児院に何か御用でしょうか？」

男の怪しい風体に不安を感じたのか、
シスターは眉をひそめて尋ねた。



シスターの言葉を聞いてフード男は、
懐から貨幣が入った袋を取り出した。

「もしかして孤児院への寄付ですか？」
「ありがとうございます。」

フードの男はこの町の聖職者に
助けられたことがあり、
その礼として寄付を行いたい
のだという。



シスターが貨幣の入った袋を受け取った時、
シスターの下腹部に何か淡い光が
灯った事に気付いたのは誰もいなかった……。



シスターが貨幣の入った袋を受け取った時、
シスターの下腹部に何か淡い光が
灯った事に気付いたのは誰もいなかった……。



何かしらこのマーク…
こんなもの昨日までなかったはずなのに
それに体の調子がおかしいわ



翌日



な、なにこれ...
体が熱くて、あたまがぼーっとして...

んっ...

ふっ

明らかに体の変調のせいか、
私は無意識に手をあそこに触れさせてしまった。

その手が触れてしまった瞬間、
今まで感じたことのない感覚が体を駆け巡った。



貞淑なシスターが、こんな事いけないのに……
そう思えば思うほど体の疼きは止まらなくなり、
行為はエスカレートしていきました。

んっ……

んっ

んっ

んっ

あっせん

ダメッ
ダメなのだよ

んっ



初めて絶頂してしまい、息を整えようとした時
昨日の男が部屋に入ってきました。

「きゃあ!! な、なんですか? 出て行ってください!」

「ふむ、そろそろ効いてくる」ろ」と思った所だ」

私を見てそう言った男は、私の手をつかみ
男の前まで引きずりました。





「や、やめてください！人を呼びますよ！！」

「まずは、少し黙ってもらおうか……」

あ……

そういつて男が手をかざした瞬間、
頭に霧がかかったように何も考えられなくなってしまった。



「さあ、シスターだったら奉仕をしてくれないか」

奉仕？……そうだ……奉仕しなきゃ……





「では、なめてみてくれ。」
「はい、わかりました...」

ちやん♡♡♡
ちやん♡

は♡♡
は♡♡♡♡♡

は♡♡

ちやん♡♡♡

「あの……これでいいのでしょうか？」
「こんな」奉仕した」とがないので……」
男を見上げるが特に不満があるように見えないため、
「これでいいのだから」と思い行為を続けていく。



わたし……どうして「んな」としてゐんだらう……
こんな「とおかしいような……」

「どうした？ さあ、続けてくれ」

「あ……は……い……」



この状況に違和感を感じたけれど、
また頭がぼーっとしてどうでもよくなってしまうた。

すごい……おチンポすく脈打ってて
なんだか……苦しそう……？





舐めれば、収まるのかな...?

ちゅぽ♡ちゅぽ♡
♡♡♡♡♡

「次は「これを啜えるんだ」

「は……は……」





「じゃあ……いっせなか……？」

「そのまま、エドワードちゃんね」

口の中がすごく熱い……それになんとか独特な匂い
変な感じがする。
これでうまくできてるのかな……。





ちゅちゅちゅちゅ

ぐぼっ
ぐぼっ
ぐぼっ

ん
ん
ん

お、おチンポが喉の奥にあたって
く……苦しい……。

喉の奥に熱いのがいっぱい詰ってる……
く……苦しい……このままじゃ息が出来ない……
出てくるの全部飲まなきゃ……。

びゅん

びゅん
びゅん
びゅん
びゅん
びゅん

ん
ん
ん
ん
ん





う…あれ、わたしどうなって…。

「か、体が動かない…どうして…」

「どつやら淫紋が体になじんできたようだな…
もう私の意志には逆らえなくなっているはずだ。」

「そ、そんな…」



「さあ、自分から私のチンポを入れる」

「ふんふん…やめてっ!」



くちゅ

はぁ

はぁ



うっ……私ンスターなのだ……おちんぼ入れちゃった……。

「や…やめ…そんな最初から激しくしないで…」

初めてなのに痛みがない…どうして…?

んっ♡

はぁ♡
はぁ♡

パンパン
ぎゅぎゅ
パンパン





う。。。なんだかだんだん快感が襲ってきて。。。

い。。。いななの。。。何で気持ちよくなっちゃったの。。。？

んっ♡

おっ♡

おっ♡

はぁ♡
んっ♡

パンパン
ぐき
パンパン

「んあーあんっ♡」

やあ…勝手に声が出ちゃっ…♡

「ずいぶん気持ちよそっついな。」

「んなに早く感じるとは…素質があったか？」

「ち、ちがうのお…♡」

あっ♡

あっ♡

あっ♡

はあ♡
はあ♡

パンパン♡
ぐき♡
ぐき♡

男にからかわれてもっと体が熱くなってしまう。
その恥ずかしさすら快感になってしまっている。



「おっ……っ♡イっくっ♡イっちゅっ♡♡」

シスターにあるまじき下品な声を上げて、
達してしまい意識が暗くなってしまうました。





私……気を失ってたの……？

うっ……また犯されてるのに感じてしまいました……

あっ♡あっ♡

あっ♡

いやっ……またおチンポ動いてっ……





「やっ……止まってください……
だめ……♡おチンポ動かせないで……♡」

うっ……「ん」の続けられたら
頭おかしくなっちゃう……♡

あう♡

あん♡

バンバン



いやっ……♡また気持ちよくなっちゃう……♡

知らない人のおチンポ奥まで受け入れて

おマンコアクメしちゃうよお……♡

あゝん♡

あゝ♡

んぐわ♡

はっ♡

ぱんぱん

ぱんぱん

あれから連日の調教により
私の精神も限界になっていた。

少し気を抜いただけで
この男に犯されたくなくなってしまふ。

「数日後」



この男がかけた術のせいか当たり前のように
体が男に奉仕しようとしている。

そして今では心すら嫌悪感もなくなってきた。しまった。

今、私には神に仕えるシスターであることのみが
心の支えとなり踏み留まれている。



「れるお〜♡」

唾を垂らしてパイズリの準備をするのも
すっかり慣れてしまった。

胸の中にぬるぬるとした
感覚が広がってきた

「んっ……♡」

では、始めます……♡」





「んっんっ…♡
ど、どうでしょうか…」

媚びるように自然と上目づかいで、
胸で陰茎を擦っていく。



「おチンポ……びくびく跳ねてる♡」
男の反応に問題はなさそうなので
だんだんとペースを上げていく



「んっ♡はあはあ♡
もっと早くしますね♡♡♡」

すごい熱くて…脈打ってる…
もう出そうなのかな…?





「みみ、こんなじろっばい……れるっ♡」



つい口元に精液が飛んできたので、舐めてしまった…。

もう全く抵抗感がなくなってしまうの、自分でも驚いている。

「ずいぶん嬉しそうじゃないか」

「そ、それは……いきなり飛んできたのでつい……」

「そろそろ受け入れる準備はできたか？」



「それは……」

私は神に仕える身です

あなたの物になることはできません……」

すでにシスター失格かもしれませんが、それを受け入れてしまえば私は……」

「あっ……入ってくる……♡」

すっかり慣れた感覚に
待ち望んでいたかのように
体が受け入れていく。

ズンズン♡♡

んっ♡





「ああああん♡
いきなり奥まで…♡」

「奥…突かれると
おかしくなっちゃう…♡」

パンパン

めっ♡

めっ♡

めっ♡

めっ♡

めっ♡



「あっ...♡」

もうイヤそりですっ♡」

「だめっ♡くっっっ!!」

ほんっ♡

あ、あ、

あっ♡♡

パンパン

♡♡

♡♡

「えっ!!
ど、どうしてとまって...!」

「お前が私に従わないなら
このままずっと絶頂出来ないまままだ
それが嫌なら...:解るな?」

「そ、そんな!」

ビ
タ
ッ

ビ
ッ



それから私は絶頂出来ないまま
弄ばれることとなる。

「お、お願いします!!
もうイかせてください!!」

あれからイキそうになるたびに
寸止めされて、頭がおかしく
なりそうになりもはや限界だった。

「し、従います!あなたの奴隷に
なりますから。だからおちんぽ
思いきり突いてください!♥」

数時間後



「おっ……♡きたあ♡」
「だめっ……♡イクっすぐイグ♡」

パンパン

「言ってなかったが、淫紋で
せき止められていた数十回分の絶頂
が来るから覚悟しておけ」

「え……!!ま、まって
そんなの聞いて……!!」



その瞬間ものすごい快感の波が押し寄せてきた。

「ああ……ご主人様♡もう我慢できません♡
……おチンポください♡」

あの後私はご主人様に心から屈服してしまいました。
認めてしまえば心は軽くなり、
快楽を素直に受け止められるようになりました。



「んあ…おチンポきたあ♡」

「あっ…♡あん…♡
ゆっくりなのもいいですけど…
もっと激しいの欲しいです♡」

あっ♡

んっ♡

はぁはぁ

あっ♡

パン

パン



「ああん!! 激しいのきたあ♡
気持ちいいですご主人様……♡」

「もっとおまんこ締めて
ご主人様も気持ちよくして差し上げますね♡」



あ♡

体ん♡

ボ♡

パン

パン

「あつ……あんつ……」主人様♥いつものように
淫紋で気持ちよくしてください……」
「あれがないと私もう生きていけない
体にされちゃったんです……♥」



「はぁん♥来たぁ……」れいらのお……
これすぐイっちゃう……」

「ご主人様もいって……
私一生懸命おまんこ気持ちよくするから
だから一緒に……」



イッ

おん

あ

ビク

パン

パン

ビク

おん

おん

ビク

パン

パン



「ああん!!イクっ……イっちやう……♡
「おっ……♡イダラっ……♡」

ああ……♡主人様の精液一杯膣内に出てる……♡

おっ

おっ

ビクッ

イクッ

ビクッ

あっ

イクッ

ビクッ

おっ

イクッ



ああ……これからも
私の事いじめてください……ご主人様♡